

防災・減災のページ

第113回新潟日報社と共に @新潟・松浜地区

むすび塾

東日本大震災の教訓を将来の災害への備えに生かそう
と、河北新報社は昨年12月16日、113回目の防災ワーク
ショップ「むすび塾」を新潟市北区の北地区コミュニティ
センターで開いた。新潟日報社と初めて共催した。東日本
大震災の語り部3人が、地元の松浜地区の住民を対象に講
話を行った。

知識と備えつながる命



監修 減災・復興支援機構

防災ワークショップ「むすび塾」は、住民6人と、語り部として公益
社団法人3・11メモリアルネット
ワークスタッフの阿部任さん
（29）、富岡市女川町で被災したテ
レビューフリーランス記者の阿部真奈さん
（29）が参加した。震災発生時に宮
城県南三陸町の公立志津川病院に
勤務していた東北大大学院医学系
研究科准教授の菅野武さん（44）、
新潟大准教授安田浩保さん（49）が
助言者を務めた。

松浜地区は日本海に面し、新潟
県の津波浸水想定で浸水被害が予
想される。阿賀野川と新井郷川が
流れ、1964年の新潟地震では
沿岸だけでなく、川沿いの地域も
津波の浸水被害を受けた。

参加者からは、「小中学校が避
難する」という意見が
出た。

松浜みどり自治会副会長の遠藤
祐一さん（68）は、「1983年の日
本海中部地震で新井郷川を津波が
押し上げて、船が転覆するのを見た。
地震の後は津波が来ると肝に銘

津波避難と低体温症対策探る

東日本大震災の教訓を将来の災害への備えに生かそう
と、河北新報社は昨年12月16日、113回目の防災ワーク
ショップ「むすび塾」を新潟市北区の北地区コミュニティ
センターで開いた。新潟日報社と初めて共催した。東日本
大震災の語り部3人が、地元の松浜地区の住民を対象に講
話を行った。

演した後、住民有志、専門家とともに、津波避難と低体温
症対策をテーマに意見を交わした。地方紙連携の共催ます
ひ塾は18回目。低体温症は、能登半島地震の被災地でも嚴
重な問題である。東日本大震災の被災地でも、震災関連死の一因として発症が心配され、対策が急
務になっている。

新潟・松浜地区



じておかないといけない」と述べた。安田さんは「新潟は川が多く、川をさかのぼる津波に警戒する必要があります。東日本大震災の被災調査を反映し、川沿いの浸水も予測したマップを、命を守る活動に使つてほしい」と呼びかけた。

松浜自治振興会会長の神田征男さん（78）は2019年6月の新潟・山形地震で津波注意警報が出た際、車避難で沿岸が起きたことに触れ「高齢者の歩行避難は時間がかかり諦める人もいる。どう誘導し、支援側の命も守れるか良い案を知りたい」と語った。

菅野さんは高齢者が玄関先まで移動する高齢者の避難訓練を例に「体操など避難に必要な体力づくりを含め、はつて玄関まで出るなり自力の行動を促すことが大事。支援する側もさられる側も逃げられ難の課題解決にむづがる」とアドバイスした。

菅野さんは病院の患者さんが低温症などで亡くなつたことを挙げ「体温が下がる死に至ることと震えに見舞われたことも報告した」。

菅野さんは病院の患者さんが低温症などで亡くなつたことを挙げ「